サキュバス　～ディナーは憂色に染められる～

プロダクトアウト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サキュバス　～ディナーは憂色に染められる～

【Ｎコード】
Ｎ５７５２Ｕ

【作者名】
プロダクトアウト

【あらすじ】
『夢魔（　サキュバス）は、キリスト教の悪魔の一つ。淫魔ともいう。夢の中に現れて性交を行うとされる下級の悪魔。』（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ参照）

以上の設定故にエロの世界では圧倒的な認知度を誇る淫魔サキュバス。まさにヨーロッパの生んだエロの権化！

この物語の主人公もそんなサキュバスの１人。

夢に現れることはないが、夜の街には現れる。誘惑した男の精と魂を喰って生きてきた超肉食系女子。

そんな彼女が次なる獲物に定めたの青年は草食系男子だった。

如何にも誘惑しにくそうなこの獲物を彼女はどのようにして喰らうのだろうか？

～選定～（前書き）

タイトルにある憂色は、“うれいろ”と読んで下さい。

～選定～

切れ長の眼に、紅く艶っぽい唇。これらを収めた顔のシャープな輪郭を包み込むのは、光沢を帯びた長い栗色の髪の毛。大きな胸と尻に比して細い腰をした身体は、女性としては長身の部類に入る。

絶世の美女、自分でそう言うのはおこがましいと思うかもしれないけど、事実、私とすれ違い、振りかえらない男はいない。

露出の多い妖艶な衣服に身を包んだ私は、獲物を求めて夜の大都会を彷徨っている。私は、淫魔。色欲に塗れた愚かな男達の精と魂を喰らう妖魔である。

この街が江戸から東京へと名を変えたぐらいの頃に海を渡ってからずっと、人間から見れば恵まれたこの容姿を武器に男を誘惑し、この身を養っている。

私に捕食された男達はどうなってしまったって？……言わずと知れたこと、私は弱肉強食の理に従っているだけ。貴方達が、牛豚や穀物の命を喰らって生命を維持しているのと同じ。食べるものが違うだけで、私も貴方も生きている。

でも、安心して私は貴方達ほど忙しく生きていない。毎日3度も食事をするなんて非経済的な真似はしない。私が狩りに出かけるのも数カ月ぶりのこと。

久しぶりの狩り。それは貴方達人間の感覚。心配はいらない。私の狩りの感覚はその程度の時間では鈍らない。

夜のオフィス街……この場所には、精気に満ち溢れた働き盛りの獲物達が数多くいる。今回の狩り場はこの街にしよう。

でも、誤算があったことも認めるわ。街はまだ眠っていない。多くのオフィスビルには未だ明りが灯り、多くの獲物達が残業に勤しんでいる。この街の人間達は、どれだけ働くとこが好きなのであろ

うか？……狩りを行うのには非常に分が悪い。この街の人間は非常に勤勉で、このような状況で私の誘惑に乗る者など殆どいない。

私がこの街にやってきた頃に比べて、狩りは明らかに行い難くなっている。しかし、この街の住人達の勤勉性を考えれば当然のことなのかもしれない。私が記憶するだけで少なくとも2度、彼等は焦土と化したこの街を見事に立ち直らせている。そんな彼等にとって、淫魔1人の狩り場を奪うことなど容易いことなのかもしれない。

眠らない街、東京。全く、とんでもない処に住みついてしまったものね。

場所を改めよう。よくあることと言えば、そうなのかもしれないけど……最上級の獲物を目の前にして引き下がるのは口惜しい。

別の狩り場へと移動するため駅へと向かう私は、たまたますれ違ったパトカーを横目に見送る。

日本の警察。近年、その能力を疑われるような不祥事も幾つか発覚しているが、それでも優秀なことには違いない。私にとって非常に厄介な存在である。

私に精と魂を喰われた獲物の末路、それはもの言わぬ屍である。屍の発見は事件であり、警察官達は血眼になって真相の究明に走る。

妖魔といっても、私は御伽噺……漫画やアニメと言った方と言った方が今風なのかしら？…で語られるような特殊な能力を備えている訳ではない。例外を挙げるとすれば、人間に比べて圧倒的に長い寿命と、獲物の肉ではなく精と魂を喰らうその食事方法のみである。

しかし、この例外故に、私は常に殺人事件の犯人として疑われるリスクに晒されることとなる。もちろん、今のこの国の法律では私の食事を裁くことはできない。不慮の事故であるという私の主張を覆すことが出来ないからである。だが、たとえそうであっても、面倒なことには違いない。だから、私は隠ぺい工作やアリバイ工作に終始徹することになる。

幸い、長い人生の中で培った知恵により今までは大した面倒には巻き込まれずにいる。しかし、近年の警察の捜査能力の向上は眼を見張るものがあり、特に監視カメラや科学捜査の発達には流石の私とて危機感を覚えざるを得ない。

それは、この大都会を離れたところで同じこと。先進国に分類されるこの国では、全国各地に警察官達が配備されている。そんな彼等を繋ぐ情報網も侮れない。東京を離れたところで、この国の治安機構より逃れる事は容易くはない。いや、むしろ、東京から離れた方が危険な場合だってある。特にこの国の田舎と呼ばれる地帯においては、未だに昔ながらの地域の目なるものが存在する。私のような容姿のよそ者など、すぐに注目の的となり、監視の目に晒されてしまう。

大都会の人ごみに紛れるほうが余程安全である。

「そろそろ潮時かもしれないわね……」

溜息交じりにそう呟いた私は、最近、住み慣れたこの国を離れることを考え始めている。

駅へと向かう途中、私はその殆どを闇に覆われた空間と遭遇する。ビルの谷間に作られた公園。昼間はこの場所で働く多くの人間達が一時の安らぎを求めて集まる場所なのかもしれない。

しかし、今は、ビルより漏れる光の届かない大都会の死角と表するのが相応しい。

「ちょっと、疲れちゃったかも……」

この街が昼夜問わず光に包まれるようになったのは何時頃からだったであろうか。妖魔である私にとって、このような暗闇こそが本

来の住処。私は、吸い込まれるようにして闇の中へと足を進める。
　すると、そこには既に先客がいた。スーツに身を包んだサラリーマン風の若い男性がベンチに腰掛けている。
そのため正確な背丈までは分からないが、男性としては小柄なようである。そんな男性の顔立ちはというと、整った目鼻をした中々の美男子。短く整えられた如何にも日本人らしい黒髪が爽やかで、好感が持てる。小柄なことに眼さえつむれば、獲物としてはかなりの上等品である。
この場所でなら、或いは狩りも上手くいくかもしれない。私は、狩りの前の昂揚感を押さえながら、ゆっくりと男性の元へと歩を進める。
　男性は、……どこか具合でも悪いのであろうか？よくよく観察してみると、額に汗を浮かべ、ぐったりとした様子でベンチにもたれ掛かっている。
　前言撤回。病人など食したところで美味しいはずがない。
　私は、その場を立ち去り次の狩り場へと急ごうと考えるが、不意に頭をよぎった別の考えにより、しばしその場に留まることとなる。

　病人をこのまま放っておくのは如何なものか？……私達、淫魔はその生態故に必然的に人間社会に接する機会が多い。その結果として、このような人間じみた感情を身に付ける者がいたとしても何ら不思議でもない。
　事実として、私にも、ほんの僅かではあるが、人間の感情は芽生えている。しかし、そんな私の感情は直ぐに生命としての合理的思考に覆い隠される。
　私が考えたこと、それは人間が一部の高級食材を確保する際に用いる手法に近いのかもしれない。捕獲した獲物を一旦飼育して、食べ頃になった時期を見計らって出荷する。
　男性の体調が戻った後に、美味しく頂いてやろうではないか……

私がこの考えに至った矢先のことである。

「おいっ、大丈夫かっ！？」

私が咄嗟に声の方向に顔を向けると、そこには、決して軽やかとは言えない足取りで私達のもとへと駆け寄る中年男性の姿があった。お世辞にも美味しそうとは言えない。

しかし、人を見かけで判断してはいけない。若い男性の上司であると手短に自己紹介した中年男性は、私に向かって丁寧に頭を垂れた後、素早く携帯電話を取り出し、１、１、９とダイヤルする。そして、電話の先のオペレーターにこの場所を的確に伝え終えると、今度は部下の襟下に手を伸ばし、ネクタイとカッターシャツのボタンを緩め始める。実に迅速かつ見事な対応である。このような頼りがいのある人物に対して、見かけだけで美味しくなさそうなどと判断した自分が恥ずかしい。

上司である男性の話よれば、彼の部下は午前中より顔色が悪く、彼の判断で早めに仕事を切上るよう指示したのだという。しかし、彼の部下は真面目な男であり、職場を後にしたのは定時を過ぎてからのことであった。

きっと、その無理が祟ってしまったのであろう。帰宅途中、若い男性は力尽き、今に至る。

白いワンボックスカーが赤いランプを回転させながら私達のもとへと到着した時、上司の男性は再度、私に向かって頭を垂れると、部下と共に車内へと消えて行く。

サイレンを鳴らしながら街灯の光の中へと走り去って行く救急車を見送った私の手に握られているのは、上司の男性より手渡された名刺。落ち着いた頃に連絡して欲しいとのことである。

本来ならば、向こうから連絡してくるべきなのだが……事態の緊

急性を考えるといた仕方がない。私は名刺を持っておらず、彼等には私の連絡先を控えておくほどのゆとりは与えられていなかった。名刺を一枚手渡しておいて、後から連絡先を聞いた方がこの場合は効率的なのである。

このような臨機応変な対応が出来る人物とは一体何者なのであろうか？私は、手渡された名刺へと視線を落とす。

「〇△通商株式会社、課長～～？」

聞いたことのない社名だが……まあ、いいわ。私は、獲物を逃した訳ではない。病が癒え、食べ頃になったら、また、会えばいい。

それまでは、別の獲物で飢えをしのごう。

～収穫～

あれから週間後、私は普段より早めに食事の支度に取り掛かることにする。

「はい、○△通商でございます」

電話を通じて愛想の良い女性の声がする。

「突然のお電話申し訳ありません、～～課長はおみえでしょうか？」

「はい、～～ならおりますが……。失礼ですがどちら様でしょうか？」

これは大きな誤算である。私は、普段、他人に名乗ることをしない。何故ならば、私は常に警察の捜査の対象となるリスクと隣り合わせの生活をしている。素性を明かさない方が都合の良い場合の方が多いのである……まぁ、どうしてもって時は偽名や偽造書類なんかを使うのだけれど。

それはさておき……

「申し訳ありません、課長にも名前は伝えてありませんの……でも、話せば分かると思います」

「畏まりました……では、お繋ぎ致します」

女性は怪訝そうにこう答え、電話を保留にする。しばらくの保留音が流れた後、ガチャリという音と共に聞き覚えのある男性の声がする。

「はい、お待たせいたしました。どのような御用件でしょうか？」

その声色は決して無愛想という訳ではないが、若干の警戒の色が読み取れるのは無理もないことである。私は、手短に自分が連絡先を知るに至った訳を話す。

「ああ、あの時の！その節は大変お世話になりました、お陰さまで――も事なきを得、今では元気に出社しております……常々、お礼をと言っておりましたので、しばらくお待ち頂いてもよろしいでしょうか？」

私が誰であるのか理解したのであろう、課長の声からは完全に警戒の色が消える。そして、私が課長の言葉に対して了承の意を伝えると、受話器の向こうでは再び保留音が流れ始める。

次に私が聞いたのは若い男性の声であった。聞いたことはない。

「すみません、大変お待たせいたしました。あの時は本当、お世話になり、ありがとうございました」

声の主は、あの時見つけた獲物のようである。都合の良いことに、あの時の手柄は私にあると思い込んでいるようである。

「いえ、私は当たり前のことをしたまでで……それに、通報も応急処置も殆ど課長さんがなされたことですし」

「そうなのですか……それでも、それまでは貴方が見ていて下さっていたのですよね。～～も言っておりました、貴方がいなければ、

お前にも気付かなかっただろうって……何れにせよ、貴方は僕の命の恩人です。本当、ありがとうございました」

獲物は、そう言って一方的に感謝の念を伝えると、これまた一方的に電話を切ってしまった。

「え？なんなの」

流石にこれには私も唖然とし、目が点になってしまう。

すると、まだ手に握ったままであった携帯電話より、着信音が鳴らされる。ディスプレイには、未登録の電話番号が表示されている。しかし、知らない番号ではない。先程電話を掛けた○△通商の電話番号である。

「本当、失礼致しました！！」

私が応答するや否や、必死に謝る男性の声が耳に響く。先程まで話していた獲物の声である。

着信履歴より、私の携帯の番号を割り出したのであろう。

獲物の言い訳によれば…彼は、ありがとうございました！の一言と共に顧客との電話を切ることが多いのだという。だから、今回もその流れのままに受話器を置いてしまった。

ドジというか、可愛らしいミスと言うか……思わず私は、クスっと吹き出してしまう。

「な、何が可笑しいんですか？」

その声は獲物にも聞こえていたようであり、彼は声を荒げるが、

すぐに落ち着きを取り戻す。

「失礼しました……やっぱり、ちょっと苦しい言い訳ですよね。嘘を突いたという訳ではありませんが……実は、その……」

そこまで言うと、彼は急に言葉を詰まらせてしまう。

「実は……他に何かあるのですか？」

「はい、実は～～より、こう言う場合は一度会って、直接お礼を申し上げるのが筋だと申し遣っておりまして。もし、迷惑でなければ、お時間頂けないでしょうか？お礼に食事でも御馳走させて頂ければと思いまして」

私の問いかけに対してここまで言い切ると、彼は一旦受話器を口から離したようであり、私の携帯電話からは今まで聞こえなかった事務所内で為されている他の会話が聞こえようになった。しかし、受話器が拾ったのはそれらの雑音だけではない。

受話器は彼の緊張までをも拾い上げ、私に伝達する。受話器は、彼が生唾を飲み込む音と、彼の大きな呼吸音を私に届けたのである。

食事と言っても、人間の食事と私達、淫魔の食事の意味するものは全く異なり、もちろん、彼の言う食事とは人間の食事のことである。

淫魔の食事ならまだしも、人間の食事に誘うのにどうしてこれほどまでに彼は緊張しているのであろうか？

何か下心でもあるのかしら？

いや、その線は薄い……女性との食事に下心を抱く男性は数限りなく食してきたが、決して女性との電話を一方的に切るなどと言うへ

マは冒さなかった。

考えられるのはただ1つ、おそらく、彼は非常に初心なのであろう。恩人へ礼と言っても、女性との食事には違いない。女性を気安く食事に誘うことも出来ない初心な青年。今流行りの草食系男子というやつである。

女性に対して奥手な彼等が私達の誘惑に乗ることは非常に稀な事であり、彼等は滅多なことでは口にすることのできない希少な食材である。

そんな食材と、まがりなりにも一対一で接触する機会を得られた幸運。是非ともこのチャンスをものにしたい。

「迷惑だなんて、これっぽっちも思っていませんわ。是非、御一緒させて下さい」

周りの雑音が彼の顔により遮断されたのを確認した後、私は昂ぶる気持ちと戦ながら必死に声のトーンを抑え、自然を装った。

そんな私とは対照的に、彼は声のトーンを押え切れていない様子である。

「ありがとうございます！お会いできるの、楽しみにしております！！」

いえいえ、こちらこそ楽しみにしております。

～仕込～

狩りの始まり。私は、時間より少し早めに獲物との待ち合わせ場所に到着した。

何事も最初が肝心、待ち合わせ時間より少し遅れて到着することにより焦らすという作戦も考えたのだけれども……きっと、今回の獲物のような真面目な人間に好印象は与えない。相手は獲物とはいえ、ルーズな女とは思われるのは癪なことである。

既に獲物の姿はあったが、私の接近に対する反応は、目を逸らすだけ。

何故ならば、彼は待ち合わせの相手が私だとは気付いていない。それもそのはず、私達が初めて出会った時、彼の体調は最悪で、私の顔を覚えるゆとりなど無かったのである。

彼は、ただ、突如視界に入った美女に対して、照れとも気まずさともとれる感情を一方的に覚えただけなのであろう……予想通りの初心ね。

「すいません、お待たせしてしまったようで」

「いえ、僕が早く来すぎただけです」

私が声を掛けて、獲物は始めてその美女が待ち合わせの相手であることに気付く。このような美女と一緒に食事をすることとなるとは……彼にとって全くの想定外の出来事であったようであり、言葉こそしっかりしているが、目は泳いでいる。

仕事帰りなのであろうか、そんな彼はビシッとスーツできめている。少々小柄である点と目が泳いでいる点さえ除けば、中々の凛々しさである。

「それでは、早速、店へと行きましょうか」

彼は私との会話を拒んでいるのであろうか？間髪入れずに彼はこの言葉を口にすると、イソイソとこの場所を立ち去ろうとする。店へ着いたら私がいなくなる訳でもないのに……問題の先送り。私は、呆れると同時に、少し微笑ましい気分にもなった。

獲物が選んだのはターミナルステーションの脇にそびえるビルに入居するイタリアンレストラン。

私達淫魔にとって、このような人間の食べ物は生命維持の為には全く役に立たない。でも、味ぐらいは分かる。店はそこそこお洒落で、料理もそれなりに期待できそうである。

結構いいセンスしてるじゃない……そう思ったのも束の間の事。彼がメニューと睨めっこした結果、選んだのは無難なコース料理。しかし、その後の選択が悪い。あろうことに彼は、ドリンクとしてカシスオレンジを選択する。

こんな甘ったるいものを飲んだら、折角の料理の味が分からなくなってしまう。私は慌てて彼のオーダーをキャンセルしてから、ボーイにこう尋ねる。

「コースの構成はどのようになっていますか？」

「エビのマリネから始まり、その後もシーフード主体のコースとなっております」

伊達に長生きはしていない……私は、人間の食事に対しても多少の知識は持っている。こう言う場合の選択肢はというと……

「白ワインが無難かしら？」

その時、獲物が私に不安そうに私の方を見つめる。ワインと聞いて怖気づいてしまったようである。彼の発想では、きっとワインは高価なものであり、財布の中身が心配になってしまったのであろう。

「あの、その……」

何かをボーイに訴えようとするが、口ごもってしまう獲物。何が言いたいのか、察しは付く。

しかし、まがりなりにも彼も男の子。女性の前ではそのようなこと言い出し辛いのであろう。

女性の前では格好良く在りたい……そんな男としての当たり前の気持ちに葛藤させられる目の前の小柄な男性に対して、不覚にも、私は少しいじらしいと感じてしまった。

私は、徐に私の前にも伏せられていたメニュー表を手に取ると、ドリンクのページを開く。そして、ワインの一覧にざっと目を通した後、ある一行を指差しながらボーイへと視線を遣る。

「これなんて合うんじゃないかしら?」

「素晴らしい選択です!ピッタリだと思います」

私の選択が的確であったかどうかは分からない……ボーイは私に合わせてくれたのであり、慣れないレストランで女性との慣れない食事に悪戦苦闘する獲物の面子を潰さないよう気を利かせてくれているのである。

「それでは、こちらをご用意ということでよろしいでしょうか?」

メニューを手にしたボーイは、私が指差した行を提示しながら、獲物に決断を迫る。

「はい、これでお願いします」

獲物は少しほっとした様子で、決断を下す。きっと、彼の目にはメニューに表示された値段だけが映っていることであろう。

私が選んだのは低価格なワイン。しかし、建前上は価格ではなく、料理との相性で選んだことになっており、その上、ボーイのお墨付きである。

だからこそ、獲物は低価格に躊躇することなく決断を下すことでき、結果として彼の面子も財布の中身も護られた。

私は心中ではほっと胸を撫で下ろしているであろう彼に、にっこりと微笑み掛ける。

すると、彼はこっそり頭を前方に傾けるなりなんなりの方法で謝意を示すのではなく、赤面しながら眼を伏せた。

結局、獲物は終始こんな感じで、私の顔もまともに見ようともしない。照れ屋というか、緊張しいというか……女性とこうして食事することがとことん苦手なのであろう。

お酒が入れば多少はマシになるかもしれないと思いもした。

しかし、彼はお酒にも殆ど口を付けなかった。カシスオレンジをオーダーしたことから察するに、彼は全くの下戸というわけではないということは推測できるのだが……きっと、ワインだから飲めなかったのね。

そんな彼は、選択の経緯の割には相性の良かったワインと料理に舌鼓を打つ私とは対照的であり、私は、何だか自分だけ美味しい思いをしてしまったと、少々の罪悪感を覚える。

「申し訳ありません……何だか、苦手なお酒を無理やり飲ませてしまったようで」

だから、彼との別れ際、私は素直に罪悪感を打ち明ける。

「いえいえ、そんなことありません。それより、こちらこそ、食事に誘っておいて殆どお構いすること出来なくて……退屈な思いをさせてしまいました」

それは否定できない……しかし、それを言ってしまうと、彼との関係はここでお終いになってしまう。それは、すなわち、私にとって狩りの失敗を意味する。

一度狙った獲物を逃す。それは私の矜持が許さない。それに何より……本当に申し訳なさそうにしている者に対して追い打ちを掛けるような真似が出来る程、私は冷酷ではなくなっていた。

しばらくの気まずい沈黙の後、獲物は、

「本当に申し訳ありませんでした……これで、失礼します」

と頭を下げ、私に背を向ける。

「ええ、本当、失礼だこと……レディーを1人残して帰ろうだなんて」

彼が2、3歩、足を進めたところで、私は彼を呼び止める。

「た、大変、失礼致しました……駅まで送らせて頂きます」

振り返った彼の顔には大きく、しまった！の文字が書かれている。
それに対して、私は腕を胸の前で組み、少し冷たい口調で言い放つ。

「ええ、そうして頂けると助かりますわ」

駅へと向かう途中、彼はずっと俯いたままで、私に声を掛けようともしない。

「本当、退屈だこと」

私の独り言は、独り言というにはあまりにも大音量で、彼の耳にも十分届くものだった。
それ故、彼はより深く俯き、小さな声を絞り出す。

「本当に申し訳ありません」

「謝って済むことではないですわ」

「本当に申し訳ありません……僕は、どうしたらいいのでしょうか？」

彼は、小さく前言を繰り返してから、救いを求めるように顔を上げる。

「そうね……もう一度、チャンスをあげるってのは図々しいかしら？」

「チャンス……といいますと？」

彼は困惑した表情で私に聞き返すだけで、私の望んだ答えは返ってこない。

でも、流石に今の言い方は少し分かりにくかったのかもしれない……このままでは、私がただ意地悪を言っているだけのようにしか聞こえない。

調子が狂ってしまった。だって、今回の獲物は今までのそれとは全くタイプが違うんだもの……と、言うのは少し言い訳臭いかもしれない。

私は意地悪をしたくてあんなことを口走った訳ではない。次の狩りに繋がる言葉を獲物が口にするよう誘導するための策のつもりだった。

ただ、彼のようなタイプを相手に、このような回りくどい方法は逆効果だったのかもしれない。

「もう一度、御一緒させて下さらない？」

「でも、さっき、退屈だっておっしゃったじゃないですか……きっと、次も同じことになってしますと思いますよ」

私は率直な言葉を投げつけ、彼の反応を伺う……彼の声色からも、そして、表情からも自信のなさが読み取れる。

「確かに、同じような事をされたら退屈してしまうかもしれませんね……だって、貴方、全然お話して下さらないんですもの……無理に格好付ける必要はありませんわ。もう少しありのままを見せて頂きたいの」

「ありのまま？」

彼は、何かを考えるようにして歩みを止める……ここは一気に畳み掛けるべきだろう。

「そう、ありのままの貴方に少し興味がありますの。貴方の事を何も知らないでこう言うのは失礼かもしれませんけど……なんだか、今日の貴方、無理に背伸びをして、裏目に出てしまっているようで」

「確かに、背伸びをしたということは否定できません。行ったこともないようなお店で、あがってしまったといいますか、勝手が分からなくなってしまったといいますか」

半分、カマを掛けたつもりだったけど、満更検討違いと言う訳でもなかったようね。

「では、普段はどのようなお店に行かれているんですの？大変、興味がありますわ、是非、教えて下さいな」

「居酒屋ですよ……命の恩人とお食事するにはまずもって不向きな安っぽい居酒屋ですよ」

居酒屋……確かに彼の言う通り、お礼に御馳走するという流れで居酒屋などに連れていからたら、それこそ、センスを疑ってしまう。彼の判断は間違いではなかった。

しかし、彼の場合、その正しい判断が、好ましい結果をもたらさなかった。今一度、彼に正しい判断を求めたところで、同じ結果が待っているだけであろう。狩りが困難のものとなってしまうことは目に見えている。

こういう場合は、臨機応変な対応が求められる。

「居酒屋ですか……是非、御一緒させて頂きたいですわ。実は、私、あまりそう言ったタイプのお店には行ったことがなくて、大変、興味がありますの」

半分は本音。ここ最近の獲物達は、私を居酒屋に連れて行くようなことは無かった。だから、私はここ最近、居酒屋とはすっかり疎遠になってしまっている。

私だって、ＴＶや新聞ぐらいには目を通し、経済動向や流行の情報を手に入れるようには心がけている。それが、この街で生きて行く上で幾分かのプラスに働いているのだと思う。

画期的な接客方法、緻密に計算された食材調達に、実業家としての経営者……私の仕入れた情報の中には居酒屋に関するものも幾つかある。

興味深いと感じる事も何度かあったが、実際に訪れる機会には恵まれなかった。

つまり、私のとった対応は臨機応変である以上に、食欲のみならず好奇心まで満たし得る、欲張りな対応であった。

「そう言って頂けると助かります……それならば、是非、御一緒させて下さい」

そして、私達は再開の約束し、今日のところは夜の都会を後にする。

～熟成～

再開の日、獲物は前回同様スーツに身を包み、対する私はいつもより露出の控えめな衣装に身を包んでいた。
今日の目的地は、居酒屋。あまり派手な衣服で訪れるのも如何なものか、と思ったからである。
それに、前回の反省も踏まえている。獲物は、あまりに私を見ようとはしなかった。その原因の多くは、彼の照れ屋な性格によるものであろう。彼は、女性と面と向かうことが苦手なのである。そんな相手に露出のいで立ちで接するのは、マイナスの効果しかもたらさないのではなかろうか。
突如目の前に現れた女性のやわ肌を前に、目のやり場に困ってしまった。前回彼が私を直視できなかった理由のほんの一部にでもそういった側面があるのであれば、極度な露出は控えた方がいい。私は、そう分析した。
しかし、草食系男子という存在は私の分析を超えて、手強かった。獲物は、今回も私を直視しようとはせず、前回同様、イソイソと私を目的地へと案内する。
この手強い獲物を誘惑することなどできるのであろうか……私は一抹の不安を覚ながらも素直に彼に追従し、薄暗い路地へと歩を進める。

私達は、まるで街の明かりから遠ざかるようにして暗がりを進む。
私が淫魔で、獲物が草食系男子でなければ、私には恐怖という感情が芽生えていたのかもしれない。

「着きましたよ」

不意に獲物の声を聞いた私の目に、暖簾を下げられたガラス戸より溢れる橙系統の光が飛び込んでくる。暖簾の横には赤提灯が掲げられている。

画期的な接客方法、緻密に計算された食材調達、実業家としての経営者といったイメージとはまるでかけ離れた昔ながらの居酒屋である。

「ここ、ですか？」

思わずそう言った私の表情には、若干の不満の色が現れていたのかもしれない。獲物は肩を落とし、申し訳なさそうに声を出す。

「やっぱり、こんな安っぽい店じゃ嫌ですよね……場所を変えましょうか？」

「いえいえ、とんでもありませんわ。なかなか、いい雰囲気のお店じゃないですか」

私は慌てて笑顔を繕うと、自ら率先してガラス戸に手を掛ける。私の予想に反して、戸を開けるとそこには先客達がおり、思い思いに会話を弾ましている。大繁盛とまではいかないが、それなりの来客数である。

彼が案内してくれたのは、知る人ぞ知る名店……ということにしておくわ。

先客達が暖簾を潜った私の存在を認知したのと同時に、それまで賑わしかった店内が沈黙に支配される。

右の者、左の者、正面の者…お互いに顔を見合わせた後、先客達は再び私の方へと視線を送り、怪訝そうな表情をする。突然現れた

見知らぬ美女の姿に困惑しているといったところであろう。
しかし、直ぐに私の脇にいる見慣れた男の存在に気付き、頬を緩める。

「お、兄ちゃんも遂にいい人見つけたか」

「こんな美人を連れてくるなんて、隅に置けないねぇ」

「そんなじゃありませんよ。茶化さないで下さい」

誰ともなく上げられた冷やかしの声に、獲物は照れ臭そうに黒い短髪を掻く。それから、隣の席へと手招きする先客に対してぺこりと軽く会釈をして、辺りを見渡す。

「悪い、悪い、折角のデートを邪魔しちゃいけないよな……まぁ、こんなとこだが姉ちゃんもゆっくりしていきな」

「こんなとこって、そういう言い方は勘弁して下さいよ」

カウンターの向こうで店主と思われる初老の男性が厭味のない溜息と共に、客の言葉を窘める。

「まぁ、確かに綺麗な店構えとは言えませんが、ゆっくりしていって下さい」

初老の男性は私達に向き直ると、掌を裏返し開いているテーブル席の場所を提示する。それに続いて、先程手招きをした客が、がんばれよ！と言わんばかりに右手を上げる。
そんな2人に対して獲物は再び会釈をしてから、今度は私の方に申し訳なさそうな視線を送る。

「気にしないで……」

私は小さな声と笑みを獲物に返す。

それにしても、彼はこの店においてなかなか良好な人間関係を築いているようである……意外と、社交性あるじゃない。

獲物と向き合う形で席に着いた私は、ひとまず、壁に張られたメニューを確認する。居酒屋ということもあって、どちらかと言えば和風のメニューが中心である。

肝心のお酒はというと……ビールに、日本酒に、焼酎にと、如何にも居酒屋といった品揃えである。

「凄い……」

思わず私が感嘆の声を上げてしまったのには、それなりの訳がある。黄ばんだメニューの紙の上では、越寒梅大吟醸、兼八、佐藤、鳥飼……酒の知識を少しでも有する者ならば誰もが一度は口にしてみたいと思うようなプレミアム酒が名を連ねている。

どのようなルートで入手したのであろうか？狩りの過程で訪れることになったこの店は、本当に隠れた名店なのかもしれない。

私は、一瞬、本来の目的を忘れかけてしまう。しかし、流石にここで高価なプレミアム酒を注文するのは控えるべきであろう。

獲物の財布の事情が芳しくないであろうことは、前回レストランでワインを注文した際に判明している。金のかかる女と思われるのは、狩りを続ける上で非常に都合が悪い。

そもそも、彼の好みが日本酒や焼酎にあるのかも分からない。前回、私が自分の好みを優先してしまい、彼にとっての食事を台無しにしてしまったことへの罪悪感もある。

ここは、彼の好みを優先させるというのが筋だと思う。

「お決まりですか？何にしましょうか」

決断を保留している私に対して、獲物は遠慮がちに尋ねる。

「正直なところ、まだ、決めていません。あまり慣れないお店で、何を注文していいか良く分からなくて……貴方と、同じものにしようと考えております」

「本当にそれでよろしいのですか……きっと、僕の頼むお酒なんて、口に合いませんよ」

「そんな事、心配なさらないで下さい。私、これでもお酒はオールマイティに行ける口なんですよ。それに、貴方の好みというのにも興味がありますの」

居酒屋に着いてきた時点である程度の覚悟は出来ている。獲物がどうような酒を頼もうとも文句は言わない。目的は、お酒を美味しく頂くということではないのである。

それに、何故だか分からない……私が注文を彼に委ねたとき、彼が僅かに垣間見せた嬉しそうな表情。それを目の前にして、酒の事などどうでもいいようにも感じられた。

「すいません、オーダーお願いします」

店員を呼ぶ彼の声は何処となく弾んでおり、声の発信元を示すために上げられた右腕にも何となく力が込められている。

彼は、お通しの小鉢とメモ帳を手にやってきた女将と思われる女性店員に対して、枝豆、軟骨のから揚げ、焼ほっけといった居酒屋にありがちな料理を注文した後に、他に食べたいものはないかと確認するように、私の方へと控えめな視線を送る。だから、私は冷やしトマトに大根サラダという美容と健康に良さそうな料理を注文し、妙齢の女性を演じてみせる。

そして、彼は最後に、いつものやつを2人分とピースに似たサインを送って、女性店員を見送る。

注文の品が届くまでの間、彼は会話の糸口を見つける事の出来ない様子で、小鉢へと箸を伸ばす。

それ故もたらされた手持無沙汰な気を紛らわすため、私が何気なく店内を見回すと……店内では先客達の談笑が相も変わらず続いている。仕事帰りの憩いの場とでも言うべきか、スーツを着崩し、ネクタイを緩めた男性達は同席者同士で他愛のない会話を弾ませ、時には席を超えて互いに笑顔を送り合っている。

まるでお互いの日中の頑張りを労っているようで、ほのぼのとして、どこか人情味というものさえ感じさせる。

私がこの国に来る以前に住んだ異国の街、まだ江戸と呼ばれていた私がやってきたばかりの頃のこの街、東京。かつての獲物達と共に何度も味わった光景であった。

既に過去のものになってしまったと思っていたこの光景が、今、思えば、私は嫌いではなかった。

しかし、その光景を共有した男達は私の獲物、私はそんな彼等を食い物にして今日まで生きている。

善とか悪とかそういう次元の話ではない、ただ、私は彼等の命を奪った。生きる為の原罪意識、忘れていたからなのだろうか、それとも、単に今の今までそのような意識を私が持っていなかったからなのだろうか……今まで思い出すこともなかったかつての獲物達の

顔が、店内を照らす橙色の光の中に走馬燈のように浮かび上がる。

「はい、お待ち」

不意に耳に届いた女性店員の声により、私の意識は狩りへと引き戻される。

女性店員は、まず先に飲み物を運んできたようである。テーブルの上では2本のグラスに注がれた無色透明の液体が泡を立てており、その脇には半分に切れた水々しい薄黄色の柑橘系果物が一対置かれている。

「生グレープフルーツサワーですよ。すっきりしてて結構、いけますよ」

必要最小限の甘みと適度な酸味を併せ持つ生グレープフルーツサワー、私は嫌いではない。

最初はどんなお酒が来るのかと少し不安だったけど……ささやかな安堵の気持ちと共に私は、半分に切られたグレープフルーツへと手を伸ばす。

その時、私の手に突然、彼の掌が覆いかぶさる。

「あっ」

思わず手を引いてしまう私。

「ごめんなさい」

たまたまタイミングが重なってしまっただけであろう。私は謝罪

の言葉と共に、再びグレープフルーツへと手を伸ばす。
　すると、彼は軽く手を上げ私の動きを制すると、そのまま、グレープフルーツを持ち上げる。

「結構、力いるんですよ、これ。それに、万が一、汁が飛んでしまったら、折角の服が汚れてしまいます」

　そして、彼はグレープフルーツをスクイーザー（絞るやつのこと）へと押し付け、その作業が終わった時、ニッと微笑みながら絞りたての果汁を私のグラスへと注ぎこむ。
　変なとこだけ、男らしいと思った……でも、そんな些細な行動こそが、かえって、飾り気のない真の優しさというものを感じさせる、ような気がする。

「ありがと」

　私が、彼に微笑み返すと、彼は照れ臭そうに私から眼を逸らし、赤面したままもう1つのグレープフルーツを絞り始めた。

　そうこうしているうちに食べ物も届けられ、テーブルの上には注文の品が出揃う。そして、彼は、

「どうぞ」

と、小皿に大根サラダを取り分け、私達の夕食（ディナー）は静かに始まった。
　彼は、なかなか私と眼を合わせようとはせず、会話も弾まない。しかし、彼がグラスを半分ほど空にしたとき位を境に状況が少しずつ変わる。
　お酒の力ともいうべきか、頬をほのかな紅色に染めた彼は少しず

つ私との会話を楽しむようになっていく。
料理への感想や、ＴＶのバラエティー番組の話に、最近経済動向なんかについてもお互いの意見を述べ合った。
彼は、長い年月をかけて培った幅広い見識に裏打ちされた私の心に素直に感心し、半分以上はでっちあげの私の身の上話に興味深そうに耳を傾ける。また、彼も若いながらも一生懸命に磨いた見識を披露し、自らの身の上も打ち明ける。
田舎から上がって来た純朴な青年……それが、私が会話を通じて率直に下した彼への評価である。饒舌という訳ではない、ただお酒の力を借りてほんの少しだけおしゃべりになった彼との会話は、楽しかった。
狩りの途中にこのような感情を抱くだなんて……とても、不思議な事だと思う。

その感情に納得しているかどうかは別にして、楽しい時間とはあっと言う間に過ぎ去るものである。私達がふと時計へと目を遣った時、終電にはまで余裕のあるものの、針は結構な時間を指している。
こうして、私達の前回よりは数段以上マシな夕食（ディナー）は終わりを告げ、私達は街明かりの中へと回帰するため、再び暗がりを進む。
そんな私達を最初に出迎えた街明かりは、ネオンサインにより放たれていた。

「あの、すいません」

それがラブホテルのそれであるとはっきりと認識できるかどうかぐらいの距離にまで近づいた時、彼が私を呼び止める。
しかし、彼はその後の言葉を中々口にしようとはしない。口元を動かしながら、もじもじとしているだけである。

「どうかされましたか？」

私が続きを催促すると、彼は大きく深呼吸をしてから、声を裏返す。

「あ、あの、よろしければ……」

流石にこれでは聞き取り難い、と彼も自覚はしているのか……彼は再度深呼吸をし、今度は声を振るわせる。

「こ、今度の休日、御一緒して頂けませんか？お願いしたいことがありまして」

何とか聞き取ることは出来た。今すぐに、という訳ではないらしい。それならば……何とも間が悪いというか、無神経というか。

呆れてもいいはずの場面である。しかし、私はその感情を覚えなかった。私は安堵ともとれる感情を覚えていた。

狩りの終焉は引き延ばされたのである。

～合掌～

3度目の待ち合わせ。待ち合わせ場所は同じ、でも、今日の私達は街の人工的な明かりではなく、自然の太陽光に包まれている。

私は時間に適した明るめの衣装に身を包み、彼はいつものスーツではなく、私服に身を包んでいる。そのセンスはお世辞にも良いとは言えず、彼もそれは自覚しているようである。

しきりに通行人の顔色を伺う彼は何処となく恥ずかしそうで、それが彼の願いの切実さを裏付ける。

「すいません……付き合わせてしまいまして」

申し訳なさそうに頭を垂れる彼の願い、それはショッピングに同行すること。

東京に出て来たからにはお洒落な衣装にも身を包んでみたい……彼は年相応の願望を抱いていたが、それは秘めたる願望に終わっていた。

東京にはそのような願望を叶える場所が数多く存在することは言うまでもない。しかし、そのような場所が存在し過ぎることもまた、一部の人間とっては問題であり、彼は余りある選択肢の前に何をどうしていいのか分からなくなってしまったのである。

「ええ、今日は貴方のスタイリストに徹しさせて頂きますわ」

私はそっけない口調でそっぽを向きながらも、彼の願いは聞き届けてやる旨を伝えてから、

「今日一日、よろしくお願いします」

と、ぺこりと頭を下げ返す。

「はい、よろしくお願いします」

すると、彼は本当に嬉しそうに顔を上げた。

私達は若者達で賑わう界隈へと繰り出し、彼は私に先導されるままに軒を連ねる店々へと歩を進める。

店内での彼は、私の提案に従い、恐る恐る商品に袖を通すことが殆どであった。しかし、稀に自ら選んだ衣服やアクセサリーを身に付け、

「どうですか？」

と尋ねる場面もあった。

私が、

「似合いますわ」

と、笑顔を作ると、彼は照れ臭そうに買物カゴへとそれを移し、逆に、

「う～ん」

と首を傾けると、彼は大きく肩を落として、元あった場所へと返す。

そうこうしているうちに、陽は西へと傾き始めていた。だから、私達は駅へと足を進めることとなり、そのまま山手線へと乗り込む。

休日と言うこともあってか、車内の混雑は平日に比べて幾分かは

マシで、私達は座席で肩を並べる。しかし、その時間は大して長くは続かず、

「今日は、本当にありがとうございました」

と、彼は別の路線へと乗り換えるために、席を立ち上がる。
1人車内に取り残された私は、そのまま、ホームでこちらを振り返り、深々とお辞儀をする彼を見送った。そんな彼の腕には、購入品を包み込んだビニールの袋が大事そうに抱えられている。

「流石にあの大荷物じゃあね……」

次第に速度を速める山手線の車内で、私は吐息と共に独り言つ…
…今日は、これでお終い。
でも、彼との関係はこれで終わった訳じゃない。

次の休日、彼は私と共に選んだ衣服に身を包んでいた。
胸を張り、堂々とした様子の彼からは周りを気にする様子は見受けられない。
彼曰く、

「優秀なスタイリストさんのお陰ですよ」

とのこと。
茶目っ気たっぷりに両手を広げ前回の成果を披露する様子は、最初に食事をしたあの日の私の顔を見る事さえままならなかった彼からは想像すら出来なかったものである。私に対して積極的に接するようになってくれたように感じられる。
お酒も飲んでいないのに……少しは心を開いてくれたようね。

私は心なしか足取りを軽くし、遊園地の入場門へと彼を誘導する。
今日の目的は約３０年前に建設された海辺の遊園地。誘ったのは私。
理由は、ただ単に行ってみたかったから。
　私は、この遊園地にこれまで足を踏み入れたことがなかった。機会がなかったわけではない。
　下心丸出しのかつての獲物達に、彼等の欲望を成就させるための一手段としてこの場所への訪問を提案されたことは何度もあった。
しかし、そんな回りくどいことをせずとも私は彼等の欲望を成就させ、狩りを成功させてきた。この場所に興味がなかったわけではないが、それよりも狩りの所要時間の短縮を優先させた結果である。
　つまり、今回は私がこの場にいるということは、私のなかにおける狩りの早期完結の優先順位が大幅に下がったことを意味している。
いや、そうじゃない……最近の私には狩りの完結などどうでもいいように思う瞬間がある。

　遊園地で彼と過ごした時間は、楽しかった。この遊園地だからだったからであろうか？
私達はその後も、休日ごとにお互いの時を共有し、様々な場所を訪れた。例えば、改装を終えたばかりの新国際空港や空の名を冠した巨大タワー、パンダのいる動物園に、由緒ある寺社仏閣、少し変わったところで言えば猫カフェ、話題の王子世代達の活躍を期待して野球場の内野席に並んで座ったこともあった。
　どれも前々から行ってみたいとは思いつつも、なかなかその一歩が踏み出せなかった場所。私達は、お互いにこのような場所の名を挙げ、時を共有する理由とした。
我ながら随分と俗っぽいことをしてるものね……妖魔のくせに。ふと、自らの本性を自虐的に省みたとき、私は私がかつての私ではなくなっていたことに気が付いた。
　長い時をかけて私の中にほんの僅かだけ芽生えていた人間の感情

が、ここにきて大きく、まるで大樹のように枝葉を広げていたのである。

だからこそ、彼と過ごす時間は、とても楽しかった。

行く先々で私達は大いに笑い、感動し、感嘆の声と共に互いの顔を見合わせ、そして、笑った。

そんな私達の様子を、周りの人間達はきっと仲の良い恋人同士だと見なしていただろう。

まるで、恋人同士のような私達。

でも、私の狩りはまだ終わっていない。一部の恋人達は私達淫魔の食事と同じ方法でお互いの愛を確かめ合う、と聞いたことがある。

翻って、彼は私に愛を感じているのであろうか？そもそも、彼は私達のこの関係に満足しているのであろうか？

確かめてみたい。でも、それは……彼に死ねと言うようなもの。

「どうかされましたか？なんだか、難しそうな顔をして、それに顔色も悪いです……どこかで休みましょうか？」

彼の気遣いが逆に私の心を締め付ける。

顔色が悪い……なぜならば、私に傍には彼がいる。彼は私の心は満たしてくれるが、腹は満たしてくれない。私は未だに彼を捕食出来ずにいる。私は空腹だ。このままでは飢え死にしてしまうかもしれない。

他の獲物で食い繋ぐことも考えた。しかし、そうすることは、

「なんだか、貴方を裏切るような気がしまして」

思わず口に出してしまった。もちろん、彼に私の言葉の意味は分からない。彼は、私が淫魔であることなど露と知らない。

えっ？と不思議そうに眼を一瞬丸めた彼に、

「な、なんあでもありませんわ」

とだけ言い残し、私は唐突にその場から駆け出した。

失言によりほんの僅かだけ生じた私の正体が明らかになる危険性への恐怖か、それとも、空腹のあまり思考が混乱してしまっていたからなのか……何故そうしたのかは、よく分からない。

「きゃあ！」

突然、私の肩はドンという強い衝撃に襲われ、私はそのままアスファルトの上で尻餅を搗いてしまう。

「痛ってぇなぁ、肩の骨折れちまったじゃねぁか！おい、姉ちゃん、どう落とし前付けてくれんだよ」

大袈裟に声を荒げる男はパンチパーマに金ネックレスと、如何にもな出で立ちであった。

「す、すいませ…きゃっ！」

私の謝罪は受け入れられず、男は私を無理やり立ち上がらせると、

「なかなかの上玉じゃねぇか、身体で払って貰うのも悪くねぇ」

と、いやらしくニヤつく。

「や、やめて下さい」

私は必死に男を振り払おうとするが、女の力ではどうしようもならない。男は私の手首を乱暴に掴むと、そのまま人気の無い路地へと私を引きずり込もうとする。

「やめろっ！！」

叫び声が辺りに響き渡ると同時に男から解放された私が、その声のした方向を確認すると、そこでは目を充血させた小柄な男性が体を小さく振るわせていた。

しかし、彼が格好良かったのはそこまで。彼は小柄な草食系のサラリーマン。そんな彼に腕っ節の強さを求めること自体が間違っており、彼はアスファルトの上に“大”の文字を描く羽目になってしまう。

「ああ、なんてこと……大丈夫！！」

私は彼の方へと駆け寄ろうとするが、それとは反対方向に働く力により、阻まれてしまう。

私は、再び私の手首を掴んだ男の力に引っ張られるままに、路地裏の陰鬱な袋小路へと連れ込まれてしまう。

誰も助けてはくれなかった。己の身の可愛さ故か……街ゆく人々は薄情な他人として、明らかな犯罪行為に対して見て見ぬフリをする。

路地裏にて、衣服を引き裂かれ、両の乳房と下腹部を顕わにされた私は、泣き叫びながら男の精と魂を喰った。己の生存本能に導かれるままに、貪るようにして腹を満たした。

しかし、私の腹は満たされても、心は満たされることはなかった。それればかりか、心にぽっかりと大きな穴が空いてしまったような気がする。

「不味い食事だこと……」

そんな不味い食事でも、しなければ私は生きるが出来ない。これ程までに、自分自身の生を呪ったことはない。

私は、傍らに横たわる亡骸を処分する気にも、顕わになった肌を隠す気にもなれない。私は、ただ無気力に、その場にうずくまっていた。

何時しか振りだした雨が私の身体に打ち付ける。

寒い。

冷たい雨水が、顕わになった肌から直接に体温を奪い取る。

「このまま、冷え切った屍になってしまえばいいのに」

私は、死にたいと思った。

「すいません……僕が非力なばかりに」

不意に雨が止んだ。

私が顔を上げると、そこには私にビニール傘を差し出す彼の姿があった。私のためにと急いで用意してくれた傘なのだろうか、彼が傘を使った形跡は見出すことができず、彼は痛々しく腫れ上がった顔をびしょびしょに濡らしながら安堵の表情を浮かべている。

彼は傘を私に押し付けると、今度は自らの上着を脱ぎ、顕わになった私の肌を隠そうと試みる。

急に私は恥じらいを覚え、両手で肌を覆った。同時に、私が先程、今は物言わぬ屍へと為り果てた傍らの男に何をされ、そして、何をしたのか鮮明に思い出す。

「私は汚れています」

私はそう言いながら彼より目を逸らす。

「ええ、そうかもしれませんね……何があったかは大体想像できます」

彼は、傍らの屍をじっと見つめながら、私の言葉に同意を示す。

ここは嘘でもいいから否定して欲しかった……彼の言葉は私の胸に突き刺さり、冷たい雨ではなく、熱い涙が私の頬をつたう。

「でも、そんなことは関係ありません」

「え？」

私の全身は彼の身体の温もりに包まれる。

「僕は、貴方のことが好きです。貴方が汚されたと知っても、その気持ちは変わりませんでした」

私の全てが受け入れられた気がした。私は、彼の胸に顔を預け、ボロボロと泣いた。嬉しかった。私の中で大きく育った人間としての感情がそう思わせた。

そして、人間としてお互いの愛を確固たるものとしたいと思った。

1つになりたいと思った。

きっと、この思いは彼にも届くであろう。

人生で最高の瞬間であると共に、最悪の瞬間でもあった。

～おわり～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5752u/

サキュバス　～ディナーは憂色に染められる～

2011年8月1日14時53分発行